

おわりに

大柿彩華

第2章では、「多様な視点化から都市を見つめて～国際化、交通、観光、環境、まちづくりより」というテーマから、各人が調査地について見つめた。

第1節として、東京都市圏の玄関口として、東京国際空港(羽田)・成田国際空港(成田)、この二つの空港が挙げられる。今後この2つの空港が首都圏や空港自体の国際的競争力を維持、向上していく上での現状と課題を国土交通省や東京都の資料から取り上げ、今後の見通しについて考察した。さらに、6年後2020年に控えた東京オリンピックに向けての取り組み、方針についても取り上げた。

第2節として、福岡県福岡市を例に取り上げ、近い将来訪れる超高齢社会・人口減少時代のなかでもコンパクトシティを活用できないものかと考えた。現状の人口分布からは、人口が点在することが予測され、公共サービスを提供する空間が広がることとなる。そこで現状の公共交通機関に着目し、駅近くに人口を密集させることによって、現状のコンパクトシティを活用できるのではないかと考察した。

第3節として、日本国内各地で深刻な問題となっている慢性的な交通渋滞について、神奈川県鎌倉市の交通需要マネジメント施策を取り上げた。パーク・アンド・ライドを始動させていたのだが交通渋滞の実質的な解消には至らず、次の策としてロードプライシングを検討し始めていた。日本国内でも実施例のない一般道での課金という施策であるだけに、注目もされるが課題点も多く存在する。今後、国内でも増えると思われる渋滞問題を、2020年の東京五輪までの解決を目指す鎌倉市の事例から調査し、有効な対策と今後の展望を考察した。

第4節として、北海道札幌市取り上げ、ここでは行政と市民が一体のまちづくりを行っていた。市民の参加率や積極性の高さや地元愛、行政の意欲や技術の良さが札幌市のまちづくりの質の高さが大きく影響していると考え、札幌市が大都市となりえた理由として、行政や市民の意見・行動力さらには観光客を魅了する観光地などが関係していると考えた。だからこそ札幌市は観光客が多く訪れ、世界中から訪れる観光客に愛される都市になったのではないかと考えた。ただ単にまちづくりを行うのではなく、市民が愛する街を目指したまちづくりが良いのではないかと強く感じ、出身地である八戸市も札幌市民の考えを見習いもっとまちづくりを積極的に行わなければならないと考察した。

第5節として、名古屋市では平成11年に出されたごみ非常事態宣言以降ごみ処理量削減という課題に熱心に取り組み、市民・事業者・行政の協働により、ごみ処理量は大幅に減少し、当時の目標値を達成し続けているが、より環境に配慮したまちづくりをすすめていた。名古屋市を成功例として紹介し、その背景にどのような要因があるのかに着目し、他都市へ適用可能な面を導き出した。環境政策のネットワーク「なごや環境大学」を例に挙げ、「人づくり」という視点からこれからの環境政策をすすめ、各セクター間の協働体制をはかるべきであると結論付けている。

第6節として、静岡県熱海市にあるまちづくり組織でのインターン経験を基に考察を行った。関わってきた様々な取り組みから見えてきた地域の声を重点的に取り上げている。その中で活性化という積極的な印象を与えるワードの中で埋没されてしまう声にも視点を向ける重要性を述べている。